

7月15日 ルカによる福音書7章1～10節

【解説と黙想】

百人隊長の僕の癒し

病気にかかった者を治すには、患者が医者のもとに行くか、医者が患者のもとに行き、対面して治療を受けるのが人間の常識である。この箇所では病人が死にかかっていたため、イエスさまに来ていただくことになった。しかし病人の上司である百人隊長は、自分や病人をイエスさまに対面させないように行動する。人間の常識からすれば違和感を覚える百人隊長の行動を、イエスさまは「これほどの信仰を見たことがない」と高く評価なさった。

百人隊長は、ユダヤ人の長老により「わたしたちユダヤ人を愛して、自ら会堂を建ててくれた」(5節)と紹介されるとおり、聖書の神さまへの信仰を持った異邦人である。

ただイスラエル人と異邦人の関わりについては当時の律法が壁となった。異邦人はイスラエル人を屋根の下に迎えられなかった(使徒10:28)。そこから百人隊長は「わたしの方からお伺いするのさえふさわしくないと思」い、ユダヤ人の長老たちを使者として送ることにもなった(6,7節)。

しかしこうした壁を百人隊長は信仰によって乗り越える。イエスさまの言葉と権威への信仰である。百人隊長は8節で、自らが所属する軍隊の事例を伝える。部下は隊長の権威に服従し、命令通りに行動する。そこからイエスさまに「ひと言おっしゃってください」と願った。一見話の飛躍を感じさせるが、百人隊長としては次のように話の筋はつながっているのであろう。「イエスさまを迎え入れるに値しない私ですら、自分のそばに来た部下に対しては権威を持ち、命令に服従させることができる。私よりもはるかに優れたイエスさまなら、イエスさまの間近にない人やもの、病気の

原因に対しても力強い権威を持ち、ひと言のもとに服従させることがおできになるに違いない。だから、イエスさまの一言をください」。

イエスさまは、百人隊長がイエスさまを人よりはるかに勝る方、つまり主(6節)なる神と認めた信仰(百人隊長はそれゆえ、ルカ5章のペトロのようにイエスさまに畏れを覚え対面を避けた)、また神の権威が距離、民族、地域の違いも超えて限りなく及ぶと認めた点から、「イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない」(9節)と感心された。

イエス・キリスト、および神の言葉が、様々な壁を越えてこの世界の人々に働いてくださる、ということは、イエスさまと地上で対面できない現代の私たちにとって大きな福音である。今から2000年前にイエスさまがなさり、聖書に書き記された救いの言動が、現代の、イスラエル人でない私たちにも及ぶことになるからである。私たちは2000年、またはそれ以上に語られた神の言葉を、今この時の頼り、希望として信じ従うことができる。

あまねく行き渡るはずの神の言葉をお持ちである主なる神からすれば、この地になお、神の言葉に逆らうところがあることは是認しがたいはずである。神の国の到来を宣言された主イエスは、その完成のため、神の言葉、神の国の支配に逆らう罪を十字架で砕かれた。だから昔に語られた神の言葉であっても、現在の私たちに救い、回復をもたらし、隔ての壁を打ち砕き、将来の神の国の完成へと導いていくのである。

(吉田 崇)

《参照箇所》 使徒10:28、エフェソ2:11以下

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」問33、49

7月15日 ルカによる福音書7章1～10節

【説教展開例】

百人隊長の僕の癒し

◇..... 単元のねらい◇

イスラエル人でない百人隊長はイエスさまが神の権威をお持ちであると信じ、畏れつつ僕を癒してくださるよう願った。イエスさまは、離れた所から言葉をかけて癒されることで、様々なものを乗り越え世界中に行き渡る主の権威を示された。イエスさまの権威あってこそ今の私たちも救いをいただけることを知るう。

「イエスさまの力は離れたところにまで」

21世紀に生きている私たちは、離れたところにいる人といろいろな通信技術を使ってやりとりすることができるようになってきました。電話やSNSで人と会話していると、すぐ隣に相手がいるように思えるかもしれません。でもそうした技術の助けを借りたとしても、私たち人間が離れている人に対してできることには限界があります。顔と顔を合わせて向き合えると、直接に助けの手を差し伸べたりできますが、遠く離れているとなかなかそうはいきません。教会でキャンプをするのを楽しみにしているお友達が多いと思います。お友達と顔と顔を合わせて長い時間を一緒に過ごせるからです。電話やSNSによるやり取りだけだと何か物足りない、ということがあるからではないでしょうか。

今日の箇所、病気で死にかかっている人が登場します。病人を直すには、病人をお医者さんの所に連れていくことが必要です。お医者さんが直接病人に会うことで適切な治療を施すことが可能になる、というのが世間の常識です。ただこの場面では病人は死にかかっているお医者さんの所に行

く力はありません。そこで病人の上司である百人隊長がイエスさまに使者を送り、イエスさまを病人のいる家にお呼びすることになりました。

イエスさまがもう間もなく病人のところ、に到着しようとした時、百人隊長から別の使いがやってきました。使いを通して百人隊長はイエスさまに言いました「主よ、御足労には及びません。わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません」。ええっ、それではイエスさまが病人に会って治療することができなくなるよ、何を言い出すんだらう、と感じたかもしれません。ただ百人隊長はこう続けます「ひと言おっしゃってください。そして、わたしの僕をいやしてください」。イエスさまは普通の人間の医者とは違い、ひと言おっしゃるだけで病人をいやすことができると百人隊長は信じたのです。百人隊長はイエスさまを「主」と呼びました。イエスさまがただの人間ではない、主なる神さまでもあると認めたのです。だからこそ百人隊長は、イエスさまは罪ある自分が気安くお迎えできる方ではない、という恐れも抱き、家にイエスさまを入れることを遠慮

したのです。

百人隊長の話は続きます「わたしの下には兵隊の部下がいます。一人に『行け』と言えば行きます。他の一人に『来い』と言えばわたしのところに來ます。また部下に『これをしろ』と言えば、その通りにします」。普通の人間である私の場合、近くにいる部下が私の言葉に従って動く、ということが起こります。それならば、私よりもはるかに優れた主であられるイエスさま、世界全体の主でいらっしゃるイエスさまにおいては、遠く離れたところからでもひと言おっしゃるだけで、人も、病気も、あらゆる者が聞き従うと信じます。そう百人隊長は伝えたかったのです。

イエスさまは百人隊長の言葉を聞いて感心なさいました。そして群衆に向かって言いました「言うておくれが、イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない」。そうおっしゃった後、使いの者が返ってみると病人はいやされていたのです。

この時代、イスラエルの人は旧約聖書を通して天の父なる神さまを信じていました。旧約聖書の中でも、神さまが世界全体に権威をもっておられると語られてはいました。でもこの時代のイスラエルの人々の間では、聖書の神さまはイスラエルの神である、イスラエル以外の人々や地域は二の次、という意識が強くありました。百人隊

長が「わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません」と言ったのも、当時「イスラエル人は異邦人の家に入ってはならない」という決まりがあったからでした。神さまの権威は差別なく世界全体に及ぶ、という信仰は強くはなかったのです。

でも主なる神さまの権威は実際には世界全体に及ぶものです。神さま、イエスさまから少しでも離れていたらもう届かない、というものではないのです。中東イスラエルという地域、イスラエル人という民族以外には神さまの力が及ばないということもないのです。百人隊長は神さまの権威が世界全体に、どの民族にも限りなく及ぶという信仰を示しました。それをイエスさまはお褒めになったのです。

神さまの権威、イエスさまのお力に限りがないことは、今の私たちにとっても大きな恵みです。イエスさまは十字架で死に、復活し、今は天に昇られています。ですから私たちが生きているこの地上にはおられません。それなのにイエスさまの言葉、神さまの言葉は時間的にも、場所的にも遠く離れているにもかかわらず、今の私たちを聞き従わせる力を持つのです。私たちに救いに入れ、信仰を与え、罪を赦し、回復させてくださる力を持つのです。百人隊長の部下をひと言おっしゃるだけでいやされたイエスさまの力は、現代の私たちにも及んでいるのです。 (吉田 崇)

《今週の暗唱聖句》

そのように、わたしの口から出るわたしの言葉もむなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす。(イザヤ書 55章11節)

7月15日

【幼稚科】

百人隊長の僕の癒し

みんなはかぜをひいたり熱がでたりと病気になってしまっ、おうちでねこんだことがあると思います。病気をなおすには、ふつうはおくすりを飲んだり、病院にいったお医者さんにみてもらったりすることが必要です。注射や点滴をうたれることもあるかもしれませんが。病気になった体のそばでいろいろ手当てをしてもらおうことでだんだんと病気はなおっていくものです。

でもイエス様はあるとき、死にそうになっていた人を普通とはちがうやり方でおおしていただきました。この人は百人隊長という人のおうちで働いていましたが、ひどい病気で倒れてしまいました。病院に運んでいくこともむりでした。そこで百人隊長さんは、「どんなひどい病気もなおしてくださるという、イエス様をここにお呼びしよう」と思い立ち、イエス様のもとに使いの人を送りました。

イエス様は百人隊長の願いを聞き入れ、病人のいる百人隊長のおうちに向かいました。その途中で、百人隊長から別の使いがやってきました。そして百人隊長からの言葉を伝えました。「主イエス様、わたしはあなたを自分のうちにお迎えできるものではありません。イエス様、ひと言おっしゃってください。そして病気の人を癒してください。」えっ、イエス様が病気の人のそばにいかないと、病気の人は直せない

のに、と思って誰もがこの言葉にびっくりしました。でも百人隊長の言葉は続きます。「わたしには、わたしに従ってくれる部下がいます。ある部下に『行け』と言えば行きますし、別の一人に『来い』と言えば来てくれます。」

百人隊長は、イエス様を「主」とお呼びして、イエス様がただの人ではなく、世界すべてを従わせてくださる神様でもいらっしゃるという信仰をあらわしました。さらには「イエス様をわたしのうちにお迎えするのは恐れおおくてできない」という判断にもなりました。でもイエス様が主なる神様でいらっしゃるならば、遠くからひと言おっしゃるだけでも病気を治してくださることができる信じ、イエス様をお願いしたのでです。

イエス様は百人隊長の信仰に感心しお褒めになりました。そして使いの人に「帰ったら、病気の人はなおっているよ」と言ってお返しになりました。使いの人が返ってみると、死にかけていた病人はすっかり元気になっていたのです。

今の時代、イエス様は私たちからすいぶん遠くの天にいらっしゃいます。でも大昔におっしゃったイエス様の言葉、イエス様のお働きは、遠さや時間も超えて今の私たちにも働いて、私たちを神様の救いに入れてくださるのです。

